

明治学院歴史資料館 ニュースレター No.8

明治学院歴史資料館発行
2017年4月

目次

- ・地方初の盲学校を作った眼科医 大森隆碩はヘボン塾に学んだ
- ・明治学院礼拝堂献堂100周年記念講演会報告記
建物語りだす物語～明治学院礼拝堂100年に～
- ・歴史資料館年間活動報告
- ・寄贈資料案内
- ・明治学院歴史資料館資料集第12集刊行案内



地方初の盲学校を作った眼科医 大森隆碩はヘボン塾に学んだ

大森隆碩(りゅうせき)は越後高田(現 上越市)の高田藩医の家に生まれ、眼科医を開業しながら、日本で3番目となる高田盲学校を開校して校長となり、高田女学校の設立にも力をそそいだ人である。

隆碩は大学南校(東京大学の前身)に進みながら、横浜のヘボン博士施療所に住み込んで学僕(研修医)のような形で眼科を学び、英語はクララ・ヘボンから教わりたちまちマスターしたという。

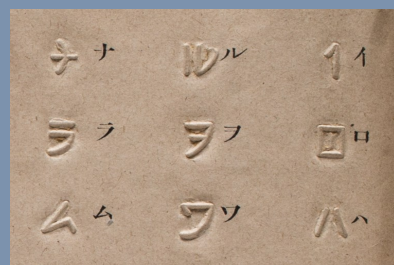
彼の医師としての倫理や良心はヘボン博士の影響といわれる。隆碩の盲学校設立申請の趣意書には「ああ視官その効を奏する能わざるも、心事未だ必ずしも盲せず」とあり、視覚器官の機能喪失により、教育から見放され道がなくなる事態を変えようとする強い意志が表明されている。近代的盲学校は、最初に「京都盲啞院」とフォールズ博士が提唱した東京の「楽善会訓盲院」の二つが開校されたが、地方では、全く独自に開設されたこの学校がはじめてである。

1888(明治21)年に創設した訓盲談話会の学校は、1891(明治24)年に県の認可が下りた。こうして開設された「私立訓矇学校」の名には、心の闇をひらくという方向性が示されている。学校のカリキュラムは四年制で、鍼や琴を習う「技芸科」とどまらず、人間としての教育を目指す「普通科(教養科)」が置かれ、修身・講話・国語・算術・理科が教えられた。

当時の識字教育は、板に漆で字を書いた識字板と活字を紙に押し付け文字を浮き上がらせた

凸字本が中心であった。訓矇学校はその後高田盲学校へと発展するが、その所蔵品の中には、凸字聖書が残されている。日本最初の盲人用特殊教育教科書はローマ字によるヘボン訳聖書の凸字本であり、フォールズたちの楽善会が製作し、スコットランド一致教会系の北英国聖書会社名で発行したが、高田にはローマ字版に留まらず、片仮名版も残されている。

松岡良樹(歴史資料館研究調査員)



大森隆碩(左)と凸字本(一部)
上越福祉交流プラザ所蔵

『和英語林集成』と大森隆碩

『和英語林集成』の編纂を手伝った日本人は、初版での岸田吟香が著名であるが、他の日本人の姿がなかなか見えない。今回寄贈となった大森隆碩の長女ミキのメモによると再版は大森隆碩が上海まで同行して編集を手伝ったという。さらに研究しなるべく早く解明したい。

木村一(歴史資料館研究員・東洋大学文学部教授)

2016年、明治学院礼拝堂は献堂100周年を迎えました。

今年の講演会は一般公開されていない礼拝堂で、講師にヴォーリズ建築事務所の芹野氏を迎え開催しました。

建物が語りだす物語 ～明治学院礼拝堂100年に～

明治学院礼拝堂は多くの人々に「原風景」となって記憶され、同時に建学のシンボルとして今日を迎えた。建物は単なる器としての役割を果たすだけでなく、歴史の証言者として私たちに多くの物語を伝える存在であろう。



提供：公益財団法人近江兄弟社

■物語の始まり

一枚の写真がある。1919年6月にこの礼拝堂で行われた一組の結婚式。新郎は礼拝堂の設計者である米国人建築家W.M. ヴォーリズ¹、そして新婦は一柳子爵令嬢の満喜子であった。当時の新聞紙上でも「子爵令嬢との理想的結婚」と報じられたこの写真は、明治学院の歴史を伝えるエピソードのひとつであるという。礼拝堂が100年を迎えたことを覚え、この礼拝堂が語りだす一つの物語としてヴォーリズ夫妻の生涯を辿ってみたい。

新婦となった一柳満喜子²が後に父の回想で「父は維新後上京して慶応義塾に学び、ヘボン³、フルベッキ⁴から西洋事情を学び…」とあるのを初めて見たとき、ヘボンが慶応義塾にどうしてつながるのか不思議だった。しかし福澤諭吉研究者の白井堯子(しらい たかこ)氏によって、福澤が横浜居留地でシモンズ⁵医師を通じてヘボンやフルベッキと出会うこととなり、英語圏の知識を得るためアレキサンダー・ショー⁶と親しくなり、個人的にキリスト教が受容されていたという史実が明らかにされた⁷。英国国教会の派遣宣教師でもあったショーが福澤との交際を逐一英国側に伝えていたのである。かくして、幕末の小野藩主であった一柳末徳が慶応義塾でヘ

ボンやフルベッキと出会ったという伝承の謎に光が当たった。宣教師であった彼らからキリスト教を知らされた一柳末徳が夫人の入信を許し、娘をミッション系の桜井女学校⁸の幼稚部に入学させたという事実は、まさに黎明期にあったプロテスタント宣教の始まりの頃のことであろう。満喜子の母「栄子」はこの時期に初めて洗礼を受けた女性華族の一人であり、娘の恩師矢島楫子(やじま かじこ)⁹の社会運動にも同道した逞しい女性である。

■ヴォーリズ夫妻の結婚

一見華やかに見えるヴォーリズ夫妻の結婚式だが、ヴォーリズ自身この華麗な結婚式は全く期待もしていなかったらしい。太政官布告令という外国人との婚姻の定めでは外国人男性と結婚する日本女性は「国籍」を喪失するとある。重ねて父が子爵であることで一般人との結婚は不可とされた時代である。周囲の反対を突破したのは満喜子の兄の義母となった廣岡浅子¹⁰の強い支持によるものであった。

満喜子はヴォーリズと出会う1918年まで米国で生活をしているが、津田梅子¹¹が二度目の留学で在籍したペンシルベニア州プリン・マー大学で学んだ。また梅子が姉のように慕う山川捨松¹²の親友アリスとのつながりから¹³、満喜子は津田塾の後継者という捨松の思いもあったという。満喜子がヴォーリズと初めて出会ったのはまさにその頃のことだった。

■宣教活動としてのヴォーリズ建築活動

ヴォーリズ建築が日本の全土に分布していることは知られているが、それはなぜだったのだろうか？その謎を解くひとつが「軽井沢」である。

当時外国人避暑地であった軽井沢にヴォーリズは来日の年にすぐ接点を持ち、夏の建築事務所を構えた。日本に派遣されてきた宣教師団体の多くは軽井沢に毎夏集まってお互いの交流を深めていた。日本における宣教活動の同志として受け入れられていたヴォーリズが全国の宣教師から建築の相談を受け入れていたことが全国へ活動を広げていった一因といえる。当然、ヴォーリズはA.K. ライシャワー¹⁴のような明治学院に関係した宣教師たちとも出会ったに違いない。

もう一つが当時すでに確立されていた宣教師団の情報ネットワークである。明治維新によって海外から入ってきた人々のための諸情報共有のために誕生したのが『The Japan Times』であり、キリスト教界での『The Japan Evangelist』であった^{xv}。いち早くそこにアクセスしていたヴォーリズは建築事業のアピールをしている。また彼は英文の報告ジャーナルで自ら情報発信を始めたのである。そうしたミッション界からの受注にあわせて一般住宅建築の施主との接点も増えた。廣岡家との出会いもその中の一つだった。そして偶然にも銀行家の住宅設計の席で施主廣岡恵三の実妹満喜子との出会いがロマンスへとつながったのである。

■ 世代を超えて共有される空間が伝える物語

順風満帆にみえた二人に立ちほだかったのが戦争という現実である。愛する二つの母国が分断される現実の中での二人の苦悩はいかばかりであったろう。そんな中で帰化を選択したヴォーリズ。つらい現実の先に用意されていた日本の皇族たちとの関係が今日の歴史につながる。来日から40年の歩みを通して滋賀県の片田舎に拠点を持ちながら日本宣教の幻を抱き、「神の国」の実現を夢見たヴォーリズは建築を通して宣教の一翼を担った生涯であった。

建物は物語を語り出す宝箱である。100年前にこの礼拝堂に触れた人と今日この場にいる私たちは同じ空間で時間を越えて歴史を共有している。私たちも自ら物語を語り継ぐ者でありたい。

【参考事項】

- i : W. M. ヴォーリズ (1880-1964)
自立宣教団体近江ミッション創立、主宰者。後に「近江兄弟社」と改称。信徒伝道者として宣教・産業・教育を統合した活動を展開し、近年は建築家として一般にも知られるようになった。
- ii : 一柳満喜子 (1884-1969) 後のヴォーリズ夫人。
父は幕末の旧小野藩主一柳末徳(後の子爵)。
- iii : ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911)
米国長老派教会の医療伝道宣教師、医師。
明治学院創立者。
- iv : フルベッキ (Guido Fridolin Verbeck, 1830-1898)
米国オランダ改革派宣教師、法学者・神学者。
- v : D. B. シモンズ (Duane B. Simmons, 1834-1889)
米国・オランダ改革派教会が日本に初めて派遣した宣教師、医師。
- vi : アレキサンダー・ショー (Alexander Croft Shaw, 1846-1902) 英国国教会(聖公会)宣教師(S. P. G)、英国領事館付牧師、聖アンデレ教会の創設者。
- vii : 『福沢諭吉と宣教師たち』
白井堯子著 未来社刊(1999)
- viii : 桜井女学校
(後に新栄女学校と合併し現在の女子学院に)

- ix : 矢嶋楯子 (1833-1925)
桜井女学校校主(現代の理事長と校長を兼ねた職)
日本キリスト教婦人矯風会初代会頭。
徳富蘇峰の叔母。
- x : 廣岡浅子 (1849-1919) 実業家、教育者、社会運動家
- xi : 津田梅子 (1864-1929) 津田塾大学創立者。
日本初の女子留学生の最年少者、二回目の留学でプリン・マー大学に。
- xii : 山川(大山)捨松 (1860-1919) 華族、教育者。
日本初の女子留学生、大山巖陸軍卿夫人となる。
- xiii : アリス (Alice Mabel Bacon, 1858-1918)
アメリカ人女性教育者。
岩倉使節団の山川捨松寄宿先の令嬢で満喜子の恩師。
- xiv : ライシャワー (August Karl Reischauer, 1879-1971)
宣教師。駐日大使のエドウィン・ライシャワーの父
- xv : 『The Japan Times』日本最古の英字新聞社。1897年創刊。『The Japan Evangelist』は1893年創刊され、後に『The Japan Christian Quarterly』に引き継がれた。

芹野与幸

(株)一粒社ヴォーリズ建築事務所 史料・広報室長



講演会当日の様子

■ 開催概要 ■

明治学院歴史資料館主催

『明治学院礼拝堂

献堂100周年記念講演会』

2016年11月5日(土) 15:00~16:30

明治学院礼拝堂

【講演者】

芹野 与幸

(株)一粒社ヴォーリズ建築事務所
史料・広報室長

【講演内容】

- 歴史には物語がある
- 一柳満喜子について
- 福沢諭吉とキリスト教
- ヴォーリズと満喜子の出会い
- 二人の結婚
- ヴォーリズの生涯
- 建物が語りだす物語

2016年度活動報告

4月 明治学院高等学校・明治学院大学入学式(4月1日、2日、6日)

入学式に出席された新入生・白金キャンパスを訪れた保証人の方々、約350名もの来館があり、多くの方に明治学院の歴史に触れていただきました。

明治学院高等学校新1年生フィールドワーク協力(4月19日～28日)

展示してある様々なテーマから、自分が感銘を受けた一つを選ぶ課題を実施協力。

生徒は展示室を見学し、課題に取り組みながら、明治学院の歴史について学びました。

臨時開館 (明治学院大学入学式 4月2日)

5月 明治学院大学授業にて、歴史資料館展示室見学利用

全国大学史資料協議会東日本部会2016年度総会出席(於：東京農業大学)(5月26日)

6月 文学部芸術学科授業協力(6月13日)

昨年に引き続き「視聴覚教育メディア論A」担当三河内彰子先生の学芸員課程授業を実施協力。履修学生に対し、展示室開設関連資料の閲覧や開設経緯の説明を行いました。

第1回 歴史資料館委員会開催(6月29日)

臨時開館 (キリスト教学校教育同盟加盟校高校教員説明会・大学保証人総会 6月4日)

7月 ニュースレターNo. 7刊行

全国大学史資料協議会東日本部会研究会出席(於：帝京大学)(7月14日)

地下倉庫所蔵資料目録整備作業

『明治学院と礼拝堂』画像提供及び製作協力(7月～8月)

8月 地下倉庫所蔵資料目録整備作業

大学学長室より資料の受入・整理

大学白金校舎オープンキャンパス展示パネル貸出

来館者約700名

臨時開館 (白金校舎オープンキャンパス 8月27日、28日)

9月 明治学院中学 白金キャンパス見学(9月14日)

明治学院中学1年生に明治学院の歴史や文化財についてパワーポイントによるレクチャーを行いました。

地下倉庫所蔵資料目録整備作業

10月 全国大学史資料協議会2016年度総会ならびに全国研究会参加(於：広島大学)(10月6日～8日)

企画展「明治学院と礼拝堂」開催

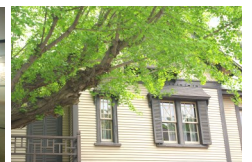
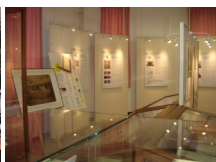
明治学院礼拝堂献堂100周年を記念して、パネル展示を開催。

明治学院に欠かすことのできない礼拝堂の歴史を写真と共に紹介しております。

礼拝堂が掲載されている新聞や冊子、記念品など当時の貴重な資料も併せてご覧いただけます。2017年4月末まで展示予定。

第2回 歴史資料館委員会開催(10月19日)

地下倉庫所蔵目録整備作業



臨時開館（創立記念礼拝・校友のつどい 10月29日）

11月 東京文化財ウィーク（11月1日～3日）

期間中、約1,500名にご来場いただきました。

この期間のみ一般公開される記念館2階大会議室に休憩スペースを用意し、当館で刊行されている資料を設置。ゆっくり閲覧していただきました。

「明治学院礼拝堂献堂100周年記念」講演会 開催（11月5日）

㈱一粒社ヴォーリズ建築事務所 史料・広報室長の芹野与幸氏を迎え開催。卒業生、職員、ヴォーリズ建築に興味がある方と多くの方に参加いただきました。「建物が語りだす物語」と題された今回の講演会では、礼拝堂を建物としてだけでなく、建築に携わったヴォーリズの生涯を交えながら講演していただきました。

講演会に参加された方に記念冊子『明治学院と礼拝堂』（右）を配布しました。報告記（P.2～3）

第2回 神奈川大学史研究会「人にやさしいアーカイブズ」参加（11月2日）

第18回 図書館総合展フォーラム参加（11月9日、10日）

上越市旧高田盲学校調査出張 関連ページ（P.1、7）（11月24日）

国立女性教育会館主催 アーカイブ保存修復研修参加（於：東京大学）（11月30日）

臨時開館（講演会 11月5日・記念音楽礼拝 11月12日・

同窓会ホームカミング 11月26日）

12月 学習院アーカイブス講習会「現代社会におけるアーカイブズの役割」参加（12月6日）

『あなたの生き方が社会をつくる 一明治学院教育ビジョン一』画像提供及び編集協力（12月～2月）

1月 第3回 歴史資料館委員会 開催（1月18日）

日本体育図書館協議会 2016年度研修会（オープンセミナー）参加（於：日本体育大学）（1月20日）

筑波大学附属視聴覚特別支援学校調査出張（1月26日）

第3回早稲田大学大学史セミナー「私立大学に於ける情報公開と文書管理」参加（1月27日）

2月 地下倉庫所蔵目録整備作業

3月 明治学院資料館資料集第12集『Telling Tales on Tokyo（東京がたり）』刊行
訳者解説（P.8）

『明治学院の歴史と想いを訪ねて 改訂版』刊行

全国大学史資料協議会東日本部会研究会参加（於：東京大学文書館）（3月9日）

明治学院高等学校・明治学院大学卒業式（3月10日、16日、17日）

来館者約160名

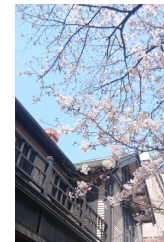
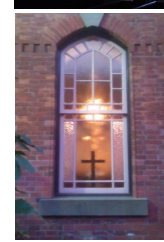
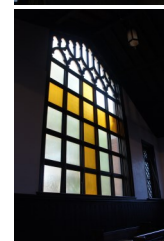
大学白金校舎オープンキャンパス展示パネル貸出

来館者約190名

臨時開館（白金校舎オープンキャンパス 3月25日）



当日配布された冊子



News

- ・2017年3月31日付 長谷川一館長退任 後任に播本秀史館長
- ・昨年度の夏に行った所蔵調査を受けて、今年度より本格的に目録整備作業をスタートいたしました。今年度は約4,200件の整備を行いました。引き続き来年度も行っていく予定です。

【統計】

資料提供・レファレンス件数 115件
来館貴重資料等閲覧件数 7件
展示室総来館者数(概算) 6,800人

所蔵史料紹介

明治学院第2代総理 井深梶之助の書をご紹介します。

修復された史料の一つであるこの書は1928(昭和3)年の初夏に書かれ、新約聖書馬太福音書第24章13節「終まで耐え偲ぶものは救はるべし」が記されている。

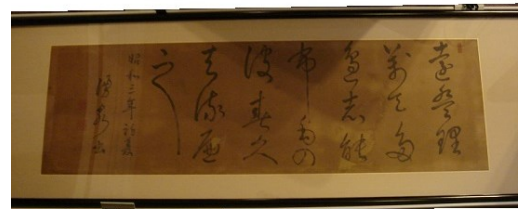
井深梶之助と書と「湧泉」

井深が書を嗜んでいたのはご存じだろうか。井深は1924(大正13)年、書家として有名な秋葉省像(あきばしょうぞう)に入門する。秋葉省像は明治学院神学部を1887(明治20)年に卒業し、その後、聖書学館において聖書や神学を教え、頌栄女学校、フェリス和英女学校、東京女子大学では習字を教えた。また、明治学院では聖書釈義を教えた。井深は明治学院に縁のある人物を師としたのである。

翌年、1925(大正14)年に井深は雅号を「湧泉」と定め、揮毫が許された。この「湧泉」という雅号は約翰傳第4章14節を語源としている。その後、井深は多くの人々から揮毫を頼まれた。

当館に所蔵しているいくつかの書も巡り巡って明治学院に戻り、現在、歴史資料館に所蔵されている。井深の書家としての一面が垣間見える史料である。

また、当時寄宿舎として使用していたセベレンス館は戦時中、英語名称の使用を憚り、「湧泉寮」と改めた。この「湧泉」という言葉は井深だけでなく、明治学院にとってもとても関係のある言葉なのである。



修復後の井深の書(都留仙次元学院長夫人より寄贈)

資料提供・取材協力 (一部)

愛知学院大学

飯田市歴史研究所

イタリア国立東方学研究所

一般財団法人 日本聖書協会 聖書図書館

いのちのことば社 クリスマン新聞

大阪女学院 教育研究センター史料室

賀川豊彦記念 松沢資料館

株式会社アルバ

株式会社教文館

株式会社クリスチャントゥデイ

株式会社テレビマンユニオン

株式会社ハウフルス

株式会社一粒社 ヴォーリズ建築事務所

関東学院大学

キリスト教新聞

久米美術館

国立音楽大学

恵泉女学園史料室

公益財団法人 山陽放送学術文化財団

横浜市立港北小学校

国学院大学

テレビ東京「L4you！」

日本キリスト改革派教会大会メディア伝道局

日本福祉大学大学院

ハワイ大学マノア校図書館

梅花女子大学大学院

フェリス女学院資料室

平和教育資料センター

明星大学 日野校図書館

Rutgers University

立教学院史資料センター

明治学院学院長室

明治学院大学学長室

明治学院大学法学部

明治学院大学キリスト教研究所

明治学院大学総務課

明治学院大学管財課

明治学院大学総合企画室(広報担当)

明治学院大学総合企画室(地域連携推進担当)

明治学院大学宗教部

明治学院大学ボランティアセンター

明治学院大学校友センター

明治学院高等学校

明治学院同窓会静岡県西部支部

調査研究資料紹介

■凸字本聖書をデジタル化

「高田盲学校顕彰室」(上越市福祉交流プラザ)には凸字本聖書が所蔵されている。これはヘボン博士に学んだ眼科医の大森隆碩が創立した盲学校で点字が考案される前に使われた教科書である。

今回許可を頂いて以下の凸字本聖書をデジタル撮影することができた。

- 『盲人片假字凸字 馬可傳福音書上巻』 大国聖書会社
- 『盲人片假字凸字 馬可傳福音書下巻』 北英国聖書会社
- 『盲人片假字凸字 約翰傳福音書上巻』 北英国聖書会社
- 『盲人片假字凸字 約翰傳福音書下巻』 北英国聖書会社
- ローマ字凸字『路加傳福音書』 宣教師ダンロップ寄贈

凸字本とは点字以前に、浮き出し文字による凸字を使って盲人に識字教育を行っていた書物である。

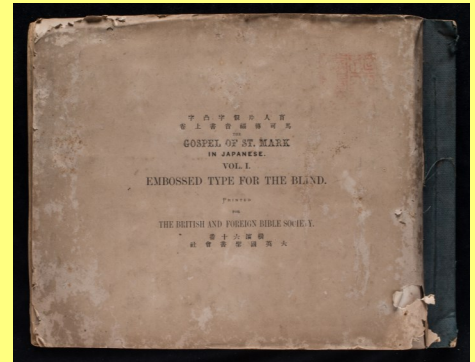
明治学院の前身校である築地大学で教えたフォールズ博士は、盲人教育のため「楽善会」という組織を作り、1873(明治6)年のヘボン訳『ヨハネの福音書』を1875(明治8)年にニューヨークの米国聖書協会に依頼しローマ字凸字で製作した。この日本最初の盲人用特殊教育教科書は、文部省編『特殊教育百年』にも紹介されている。

この凸字の流れを組むカタカナ版凸字聖書は旧高田盲学校と京都府立盲学校にのみ存在する貴重な資料であり、盲教育が凸字で行われていた時代に、日本のキリスト教の人々が盲人教育に取り組んだ偉大な遺産である。

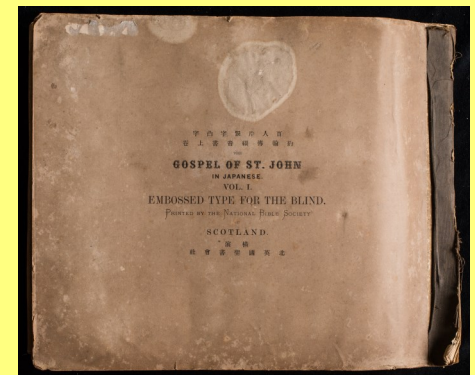
活字組版はマルコ伝ではベタ組であるが、ヨハネ伝に至ると分かち書きへと解説し易く進化し、用紙も凸字印刷時に湿潤させた跡がある。

このように今回の撮影と調査により、凸字本の聖書の原典の確定や製作方法の推測に大きな進歩がみられたため、次号資料館ニュースで掲載したい。

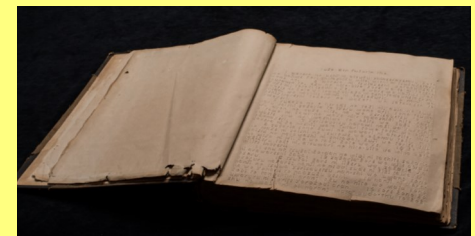
松岡良樹(歴史資料館研究調査員)



『盲人片假字凸字 馬可傳福音書上巻』
大国聖書会社



『盲人片假字凸字 約翰傳福音書上巻』
北英国聖書会社



ローマ字凸字『路加傳福音書』
宣教師ダンロップ寄贈

※全て上越市福祉交流プラザ所蔵

ご寄贈頂きました資料の一部をご紹介します。ご寄贈頂きました方々へ感謝いたします。

- 秋元 直茂 様 秋元茂雄牧師関連資料
- 大塩 武 様 大学ブランディングプロジェクト関連資料
- 太田 直彦 様 『ピアノの巨人 豊増昇』
- 岡 伸一 様 ヘボン博士の生家等関連資料
- 川口 伸一 様 レコード 他 9点
- 津田 道夫 様 『津田仙の親族たち』 他
- 田部 シズ 様・正木 かずみ 様
『“地方”に初めてできた雪国・高田の盲学校』、
「長女ミキの書いた隆碩の履歴メモ」
- 椿 紅子 様 『明治期に出版された日本語歌詞のカンタータ
スカダーの「クリスマスのよろこびのおとずれ」』
- 樋口 隆一 様 明治学院バツハアカデミー関連資料
- 他大学・学校・資料館・博物館より 資料集・ニュースレター・年史類

寄贈のお願い

明治学院歴史資料館では
本学院の歴史に関する資料を
収集しております。
皆様のお手元に資料や
情報がございましたら
ご連絡ください。
宜しく願いいたします。

Telling Tales on Tokyo

『東京がたり』

Presbyterian Church in the U.S.A. Board of Foreign Missions

明治学院歴史資料館資料集第12集として刊行された本書は、米国長老教会海外伝道局が無料配布用に作成した小冊子の全訳である。この小冊子は日本で印刷されている。出版年は記されていないが、上海事変（1932年）や賀川豊彦の『愛の科学』中国語版出版（1934年）に関する記述があることから、1930年代半ばに作成されたと推察できる。

当時東京で活動していた宣教師らのエッセイを収録したもので *Telling Tales on Tokyo*（『東京がたり』）と題されている。表紙には竹の皮が用いられている。緑色のインクで竹のイラストと笹の葉風にアレンジされたタイトル文字が描かれ、同じく緑色の糸で和綴じされている。

Telling Tales on Tokyo（『東京がたり』）は、全米各地の長老教会において、礼拝の後や集会の場で配布されたと思われる。その目的は、宣教師たちが体験している東京の日常を伝えることを通して、教会員に海外伝道に対する関心を促し、延いては、支援の献金と若者の読者には宣教師を志す気持ちを喚起することにあつたと言える。

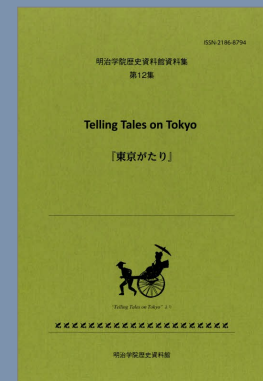
掲載の8エッセイには、宣教師たちが運営に関わり、伝道活動を行った教育機関やセツルメント、ハンセン病療養所、学生センターや当時活躍していた日本人クリスチャンの人物像などが克明に記されている。明治学院、女子学院、日本聾話学校、慰廃園、賀川豊彦、河井道といった名前が登場する。

この中でとりわけユニークなのはネーザン・ヘルム (Nathan T. Helm) による「明治学院の少年たちは英語で思考する」である。ヘルムは明治学院で教鞭をとった宣教師であるが、このエッセイはヘルム自身の筆によるものではない。明治学院の彼の教え子たちが英語で記したエッセイを取り上げたものである。7名の文章が紹介されている。

テーマは多彩である。信仰、家族制度、家父長制、男女平等、資本主義、愛国心、戦争、平和などについて、自らの考えを英語で簡潔に表明している。「父親は独裁君主であってはならない。もし、父親が誤った判断を下したならば、私たちは父親に再考を求めたり、助言をしたり、忠告したりするべきである」、「家庭においては、お互いに歩み寄ることが大切である。子どもたちや妻は自らが正しいと思っていることを主張する権利を持っている。神様が子どもたちや妻に授けた意志というものは尊重されるべきである」、「女性も男性と同等の活動や仕事の機会が与えられるべきである。現在の日本においては、女性たちは過度に家庭に縛られており、その現実を認めざるを得ないのはとても残念なことである」、「未来の日本の女性たちは、今日よく見られる修道院生活を思わせるような家に閉じ込められた状況から解放されるべきである。そして、各人の素養を生かして、好きな場所で働くべきである」といった意見が述べられている。

この小冊子が発行された1930年代半ばの日本においては、父親の権力は絶大であり、女性は男性に従うべき存在であった。家族が対等に意見を交わし、女性が社会で活躍することは、今日とは異なり、容易ではなかった時代である。そのような時代にあつて、明治学院の生徒たちは夫婦や親子間のリベラルな関係や男女平等を堂々と主張している。彼らは、ヘルムら宣教師から、英語という外国語のみならず、社会を洞察する力や自らの意見を明確に論述する力を教授されていたことがエッセイから十分に読み取れる。昭和初期における明治学院の教育の質の高さを示す史料と言えよう。

訳者：齋藤元子（歴史資料館研究調査員）



2017年3月刊行
定価：600円(税込)

明治学院歴史資料館
ニュースレターNo. 8

発行者 明治学院 歴史資料館
発行日 2017年4月1日
電話 03-5421-5170
〒108-8636
東京都港区白金台1-2-37

E-mail
shiryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp
ホームページ
http://shiryokan.meijigakuin.jp/

2017年度 歴史資料館委員・スタッフ

【明治学院歴史資料館委員会】

委員長 播本 秀史・歴史資料館館長(文学部教授)
委員 秋月 望・図書館長(国際学部教授) 植木 献(教養教育センター准教授)
佐藤 公(心理学部准教授) 鈴木 直子(図書館資料管理課長)
秋山 智一郎(法人事務局長) 青野 由美(明治学院東村山高等学校教諭)
岡村 淑美(明治学院高等学校教諭)

【歴史資料館】

研究員 鈴木 範久 辻 直人 木村 一
研究調査員 松岡 良樹 齋藤 元子 加藤 拓未
事務局 桑折 美智代 事務スタッフ 松原 友紀子 岡安 圭子